日本美術教育生花法

全

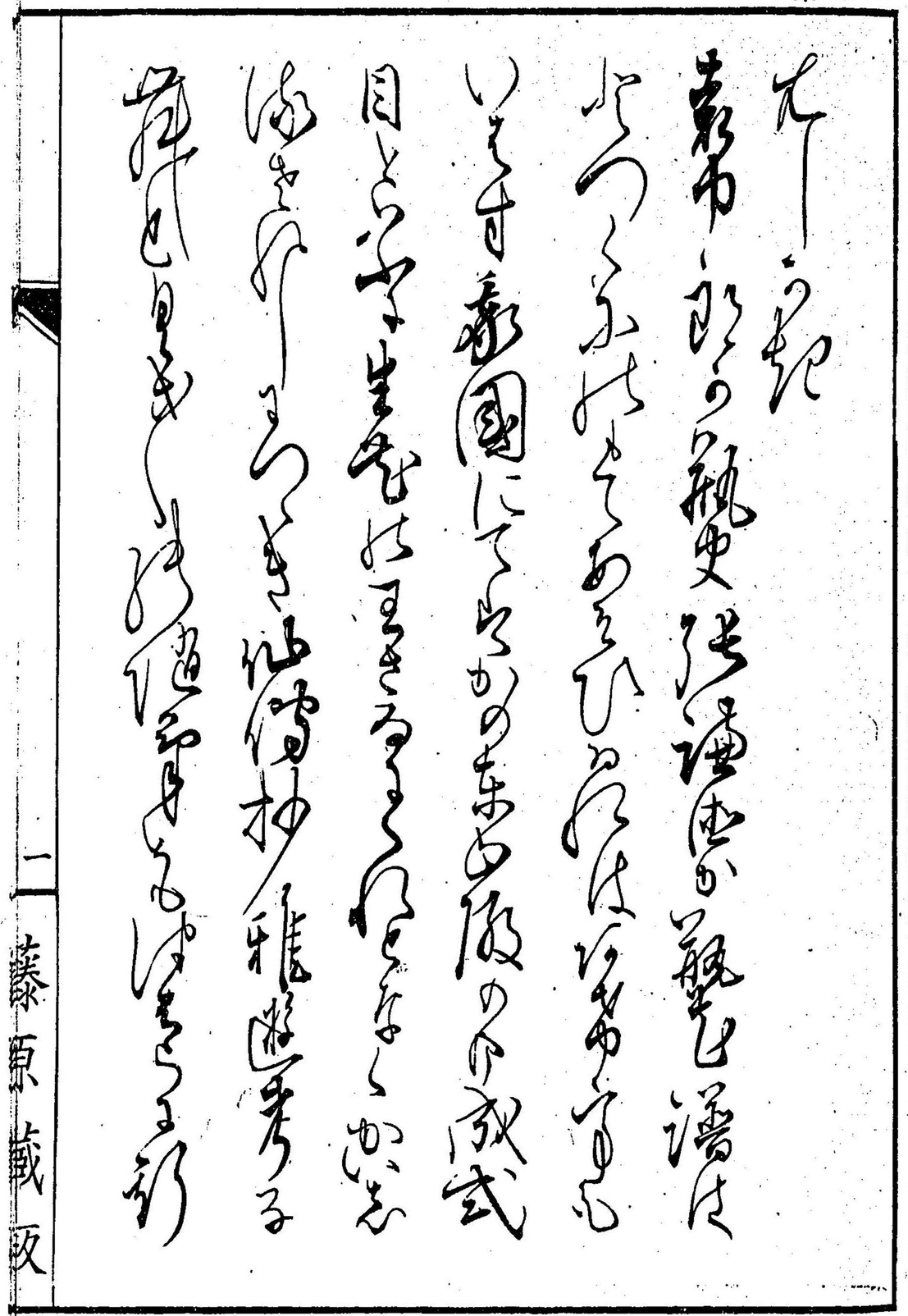
特42
370

特42
370

日本美術教育生花法全

一氷齋梅長
政司崇史著

藤原藏版



予が日本義術教育生花法と題
する書を著わす主意は柳生花
なるものは一の道徳義術教育事業
に先て即ち下傳あるが如く人倫
五行の道を正し天地陰陽の造化
を顕し其鮮麗を賞し以て心

目を樂ましむ今世教育の進歩
日に著しき當局者敎育を解ら
ずと雖生花は道に於て之を解
きるもの少なし子童婦女子を
して娯樂は餘德義は心を興起せ
しむるの一端に供せんが爲安書を

開版せしに世は生花を樂しめる人と其れ
是書に就て其流派は教ふる所を曉るを得んか

午時明治廿有七孟夏盡日

遠洲流家元職

一次齋梅長

政司宗史

美術教育生花法

目録

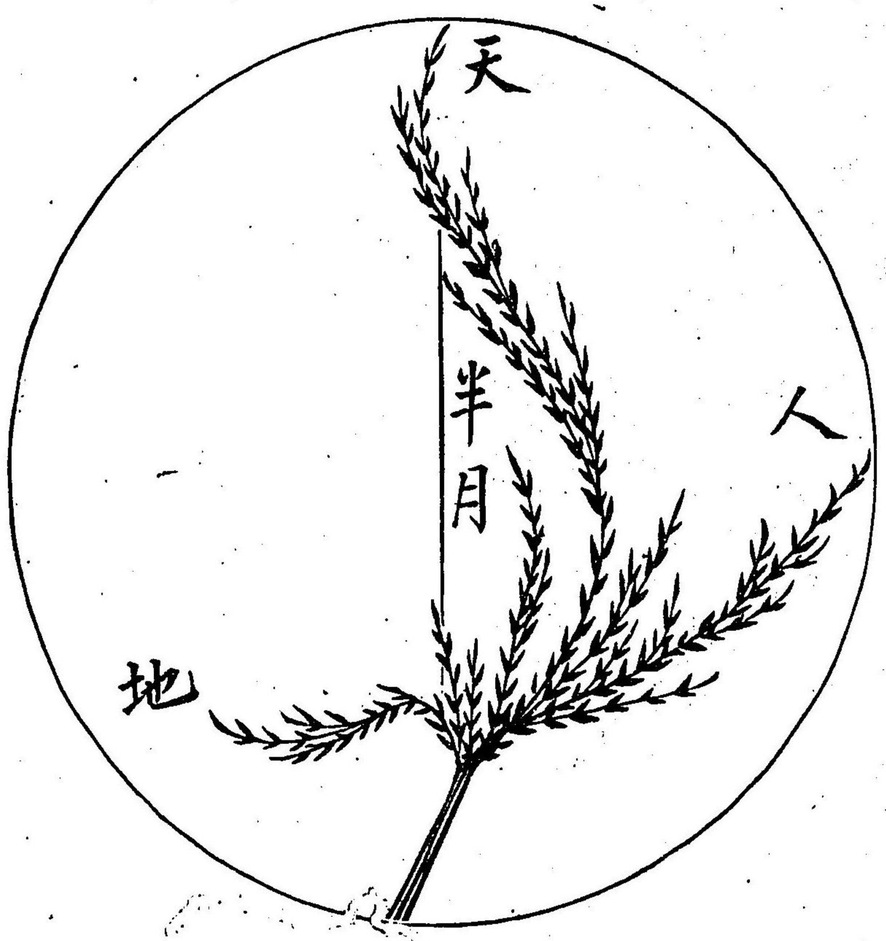
一天地人七五三生花之傳
一陰陽和合之事
一五偏五常五行之事
一祝儀生花之事
一書院并床之間事
一天地人三才之事
生花大意之事

諸道皆夫々其大意を謂ふなり生花其大意を殘る所無き言語筆紙に記し盡さ事中々容易其事なあ

らず此に真大暑を書き仍て之を委敷を學ばんを願る人も良師に付修學すべし

天地人七五三生花之事

天地人竹木を曲直方正面を以て半月其形を取り生ずるを圖之如く肝要也



是れ○を復合すれば一圓の形をなす陽月は如を月ふるを是は仍て日月二光陰陽和合乃生花を傳ふ天人地と生るを仍て板ふるを天を天神七代を納め地を地神五代を納め人を人皇三世をす此れを合

すれば七五三拾五をふるを之を以て所謂十五日迄を一月まあ七五三は四を以て愛を以て天人地を生るを天乃草木の切方を七すの位は切至人は切方を地神の五さ愛して五すの位に切至地は切法

を変じて三才の位に切る故切法を
変ずるを何故ぞと云ふか天い
人に遠し地も人に近し是れを
以て変ずる則七五三寸の生花
を口傳す
前書れる意を了解するを花道を

學ぶを云ふ先ぼ花を入るるに草木
其れ其れの生を解き認め高き者
を高く低き者を低く水に生る物
も水陸に生る物も陸即ち其の
性質を今ちて陰陽之備を違へ
ず造化すべし陰陽四しき時を五行

自ら備を五行備ふるときは德を鈞
合宜敷を骨格完備せる人に比べ
鈞合悪しきに不具なる人に比べ
言外の信を顯すと云い初に物云
ずして當座響應に信夢主の心中
まある事一瓶に花を顯す妙信

客座に先ち物言ずして心中情り
知るべし一瓶の花調まざる時き亭
主心中信無く枯き花を人感ぜ
ず故に鎖に慎もべき業なり

藤原藏版

一空天　一　木　一　仁
三火人　二　火　三　禮
五地地　三　土　二　義
二風通用　四　金　四　智
四水體　五　水　五　信
右一瓶の花は五偏五常五行を能

く備へ注意して不具足無之樣正
しく生命ある事肝要也

祝儀生花之事

辟斗を添ることを祝儀をすべし不
宜安き花を用申ることを禁ず但主陽
は進ませて入ること花瓶を休筒を

義し申す 右之經筒は如意輪あら
類を用ゆべからず

書院并床之間之事

書院床之間い何等は為る設者
石如是れ即ち畏き大又世なる二
柱の尊を鎮座奉り一家住居し

大切の厚恩産を設申あり又一
天萬上は志器の奉迎鎮座す

天地人三才之事

一才を總て物の數を始め定む
乃ち云義也是れ例を天を一才を
唱く地を二才を唱く人を三才を唱ふ

德を諸事に付き三戈具足器なる事
先事なり又三戈不具なる事
を萬代不易此道理なり故に天
地人三戈不和なる時は萬物動乱
して穏かならず然れども雖天地人
の三戈を更に動するなし假

今夫婦に子なき時は其家退轉
す是に依て子なき女を去るべしと
云ふを有司夫婦子孫を三戈調
ふ時は夫地人の三戈能調ふを一般
なり然れども雖天不意の事有り
ば一家此風隙絶ゆる出来を遂

よりて一國を治まりすゝめて轉動
すゝめれば依て七五三之生花の麗
しきを以て新穢之濁花中なる
す又草木を以てすゝめ行叛者
かを云ふ總て草花を更に二宗
く我が特性に從の四季花を開

き葉を生じ風雨寒暑をも厭ふ決
して違ふ事あり然れども人を
一定れ性質を有する事なく時
時刻々に其性を變ずるものなり
之れに及し生花を一定不變まし
て自ら五偏五行五常を全備す

るを以て饗應の最上とするものなり亦生花は一二三、四六の秋を謂ふ
口傳あり四を四季の云ふして春
復秋冬耶かはてもてなすなり
を萬世不易の定則なり中央の四な
るも乃ち天地人此六を合して十

を加へる天地人の三先あり之を雖ど
も四季の寒暖日月此光輝一切を
一て欠を可からざるの理なり假
令ば物事充分なるを謂ふ方を有り
德て人は其の充分なるを不足
と思ひ我が儘增長し我れが慾心

を逞しくする勢ひなり然れども草木の
性の十分を能雖に已れが特性に随
ひ四季替はるゝに咲くものもし
て四六の秋を十分に正しく用ひ
るは草木なり秋を云義は總
て物の取へれ時にして万物か一

切の作物を收穫するを秋を云
が如し是れを以て四六の秋を唱く
草木は十分の利を備へ多の勇
花なり故に賞翫すべきを生花
の業也

附記

前記の如き趣意ふるか故教育上
必須の業なし決して老後風流の
翫弄業まあらす然れとも世人單
に此の業を以て風流こうしむる
実は概嘆に堪へず依て あるべ義
術教育生花法を著し世人の初學に借す

一次齊梅長
政司崇史記す

生花學び法

一本勝手之圖畫
一逆勝手之圖畫
左之通り也

藤原藏版

天七寸ノ位
主位
本勝手
人五寸ノ位
地三寸ノ位

客位
逆勝手
通用
天
躰
人
地

圖之如を一瓶の花を生ずるを天井花枝を七寸の位に切り人井花枝を五寸井位に切り地の花枝を三寸の位に切り生花井平を畫すときを伝之如を一瓶の花速かを相調事誠に尊ぶべきの業なり前條井如を大切なる床の間く七五三生花を以て麗敷生餝るが故を七五三(シメ)縄生花を云也能く心得べき事也

生花を全躰茶室を書院を別ち茶室を輕く入れて美し書院

を叮嚀まへらぐし其傳を東山殿
の御風流を主式法定至る也

生花見様之事

床前の畳一枚隅より座し手を付か
へ見るべし拭物等見るとき拭物
より見初め次に花より至るべし其時

一貴人より進まる時覧候べき挨拶あ
らば床前まで見るべし係一床
縁へ手を拭るべかるべず但扇子等
を初め床へ付るとき拭き置掛花
を見るとき水際より見扇帛見
上るべし跡まで花摔を見る事

生花挿様之事

花を見て叢るを總て厳しきやう
挿様すべし花しべの方損じあ
ば虫花流れ有るべし
一花弁重の物多きときは色差
合なし

一葉弁重の物生るときは根より花
ある者を生ずべし葉弁より雅興
一九葉蘭を葉弁重を弁る事
一一重切花生は木れ物を上へ生
はして上は草花を生ず下は木
れ物を入るべし此れを若れ松

は峯北草を云ふ古歌はよりを是
れを許すと云一の口傳也
一禁花只得の事總じて針ある者
をへらず
一花は多少は事花瓶大なるを
を會釋花是非遺ふべき事

一一重切花生者を花上ぬ樣生く
べし

花生連環筒之事

一是を山崎妙壽庵好叔好之釈八切
の長きと短きを一所は宵勢多る
者にて又を乱杭ゝゝ云也

一旅枕花生れる事を一重切之勝るる
短き者也遠洲公之餞は夏之夜と
云牽牛花を生ずる事諸書に見申
ずる也

一二重切花へ心得れる事傳に曰く上
下陽陽を以て緣之切ぬ様生ず

可し

一花輪二重切れる事花元分寸高ず
ずて宜し

一竹手桶花生れる事少し手を捻じ
らしへるぐる事

一籠花生ずる花澤山に入る可し但

し籠を手あるときは大花を手を
捻らし生ぐし小花を手に中く生く
可き者也

一瓢置花に事傳に曰く瓢子之口よ
り出生る心を用りて生ぐし
一二對釣瓶を二重切の心にて生事
重有て良し
一二對釣瓶を一段に置き一段を釣
て好し
一四方花挿しの事四方を角形
正面を見るぐし

武蔵野之傳

一此花ハ十五夜ハ月見ヨリ入る
事九月十三日迄ハ限り菊ハ
薄を交て生ける事

旅行花之事

一此花ハ立帰ヨリの枝を用ゆべし
猶亦帰ヨリ花の寄花を入る事

家督相續花之事

一此花ハ相續する人の方へ花を
麓の勢生命ヲ為ス其根ハ唐土
堯之代ハ草木ハ繁て都の方へ
麓きこゆ生きれば生人を祝して医
の麓かなり心ある可し

掛物之前花置樣之事

一置花生之時花しゝ一軸之右印樣之處〳〵花構〳〵候時ゝ花生を軸先〳〵直す〳〵し花函の人物等を花ゝ隠す事を忌む

一釣舟花生之事掛物横掛之時ゝ舟は釣ゐ有からず

一卓月花之事葉之繁まる者を一段三段等ゝ分ち高低よゝれ恢も若分不候きる姿よゝ〳〵し

又枝を流しかゝ葉〳〵岩之狭間ゝ候ゝ多れ多る姿ゝ生ゝ〳〵し

一桂樓之事此花左籠ハ薄をあし
らひ入るゝ事是れ一の口傳なり
一柳賞翫之事傳ハ曰く京極家之
常向ハ今七二本ハ柳書と申して
見申候なり

歌ハ

花ハ勝ゝ者柳ハ枝
左歌意を擁ス一ハ古傳なり
他ノ花を遺ス心得之事
一他所ノ花を遺ス事ハ食みそぎし
ゝ悪しゝ見咲き過ぎたるも良かり

ず凡て半開を良とす花心下枝
葉も取らず其儘遣す事是れ却
て立花に近き趣あり但し根元水引を
結ぶ事肝要なり逆さまし
一本半花生る事あるとも安心潔く
事は花退座之節名残を見る様

なすべし朝夕は倶舎釋する事
薄板面之事
傳に曰蛭掾矢筈吹筒等
柱撰釘寸法之事
簾抜床之間壁根へ釘打つまは中一分
厚さ一分三厘長さ座より上分四寸

四分半 座巾八分 鍵之先迫呈 一分二
厘之定也

花形數之事

形木地俱しるべ 目筋あり 隅々丸を
一尺四方 縁高き八分厚さ二分低板
一分足高き 二寸三分是れ仍ち遠
測りの用ひしれし也

花生之事

一二重切 二重切 三重切 尺八利休好
也

手巾沙之事

帛巾四方を用ひ端を捻縫也是

を水を吹花入様に會釈仕時の用中

一芍薬之事共花總て祝儀に禁

ず

一柳を十月より三月迄生花

一蘭を軸を稼を長短を拵く生を

可し

一楓を紅葉仕時候に成しらい花

用のみを以て生る事

一日扇牡丹花菖蒲、を生學を

愛て知るべ

一奥傳免許札丈帝一尺二寸五分中

三寸

一薄板寸法一尺五寸九分巾八寸七分

花配りの事

一花配ハ方い割又を以てすべき

縄て物を陰陽代二つよ重発す

ゑ板ゑ又竪ゑ又字ハ方は我

身躰心中の曲み無を実躰なる意

を以て正しく生る趣意也

変真花活法

葉蘭 二枚 根メ花付 一重切

全 全 二重切

全 全 天人地

葉蘭 三枚

仝
仝
仝
仝
仝
仝

三重切
真行草
二重切
三重切
天人地
真行草

根メ付

葉蘭 五枚

仝
仝
仝
仝
仝

釣花
一重切
天人地
地流｜
人流｜
釣花

葉蘭 三牧

仝　三重切
仝　真行草
仝　二重切
仝　三重切
仝　天人地
仝　真行草

根メ付

葉蘭 五牧

仝　釣花
仝　一重切
仝　天人地
仝　地流一
仝　人流一
仝　釣花

蕙蘭 七牧

全 真行草

全 天人地

全 人流丨

全 地流丨

全 内陽

全 天添流

蕙蘭 九牧

全 糅流

全 二重切

全 天人地

全 人流丨

全 地流丨

全 鈎花

葉蘭　十一牧

仝　二重切
仝　三重切
仝　根〻付
仝　天人地
仝　人流丨
仝　地流丨

葉蘭　拾三牧

仝　内陽
仝　天添流
仝　二重切
仝　三重切
仝　鈎花
仝　天人地

葉蘭拾玖

仝 三重切
仝 天人地
仝 人流丨
仝 地流丨
仝 內陽
仝 天添流

仝 地流丨
仝 人流丨
仝 內陽
仝 天添流
仝 稙流
仝 二重切

葉蘭 十七牧

仝 控流

仝 二重切

仝 三重切

仝 天人地

仝 人流丨

仝 地流丨

葉蘭 拾九牧

仝 內陽

仝 天添流

仝 控流

仝 二重切

仝 三重切

仝 天地人

人流し　仝
地流し　仝
内陽　仝
天孫流　仝
雅流　仝
二重切　仝

葉蘭　二枝一枝

三重切　仝
天人地　仝
人流し　仝
地流し　仝
内陽　仝
天孫流　仝

今　控流
今　二重切
今　三重切
今　水盤生
蘭　二十三枚　同　斷
二十立枚　同　斷

二十七枚　同　斷
二十九枚　同　斷
三十一枚　同　斷
三十三枚　同　斷
三十五枚　同　斷
三十七枚　同　斷

三十九枚　同斷
四十一枚　同斷
四十三枚　同斷
四十五枚　同斷
四十七枚　同斷
四十九枚　同斷
五十枚　同斷
五十五枚　同斷
六十枚　同斷
六十五枚　同斷
七十枚　同斷
七十五枚　同斷
八十枚　同斷

八十枚　同斷
九年枚　同斷
年表　同斷
百枚　同斷

百枚以上根を分き生ずる
種々木物

天人地、茶室花、真行草
天　地、人　流、地　流
天　流、天添流、躰　流
躰　崩、通用流、本添流
人添流、控　流、西陽流
見越枝、水空々里、三段流

一重切、二重切、三重切
五重切、七重切、水盤
魚頭生、造舟、止舟
送作舟、字作柴舟、燒物舟
撥空舟、靴舟、入舟
出舟、居舟

婚禮花

仝色直しの花

市初、木賊、水浮、
蘭、九十九、鳶尾、
紫苑、川骨、蓮、
芭蕉、水仙、菖蒲、

竹、藤、　萬年草、
花を生法を亨て知るべし
種々草木生方
大　生、根付様、交　生、
生學を受て知るべし
大竹すかゝ方

魚尾、　金魚尾、　明鳥、
燕、　飛　鳳、
神社、　魚　尾、　飛鳳、
佛閣、　明　鳥、燕等也
種々禁忌之枝生學を受て知るべし
結物之事

一草木尺八切生方生學を亭て
知るべし
南天、竹、葉雜頭、は生學
を変て知るべし
草木種を水陽之事生學を変
て知るべし

前書之條々是れ生花之奥儀秘
傳也而を古来世人生花書を著
し草木生法を示す者多し然て
も雖其諸書を概ね圖面を以
て其其生方を示し草は規則其見
法而已にして実際如何為る意を以

て生涯の遺す所甚迂遠なるが如し我が著す所此書も生花
の純粋完全なる意味を示し將来
教道を勵むものをして先づ大躰此
意味を會得せしめ然る後師匠に
直接生法を學ぶべし

明治廿七年十月廿八日印刷
仝　年十一月三日出版

價五拾錢

版權登錄

著作兼發行者　大阪市東區鎗屋町二丁目二十番屋敷　藤原長治郎

印刷者　大阪市東區農人橋詰丁二十四番屋敷　山田英助

版權所有

美術教育生花法

特42
370

076034-000-0

特42-370

美術教育生花法

藤原　長治郎／著

M27

CEO-0209